

科学研究費助成事業（基盤研究（S））中間評価

課題番号	18H05274	研究期間	平成30(2018)年度 ～令和4(2022)年度
研究課題名	ペプチドシグナルを介した植物成長の分子機構	研究代表者 (所属・職) (令和2年3月現在)	松林 嘉克 (名古屋大学・大学院理学研究科・教授)

【令和2(2020)年度 中間評価結果】

評価		評価基準
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、近年注目されているペプチドシグナルが植物の成長制御に及ぼす影響について、複数のアプローチから明らかにすることを目指している。

既に幾つかの重要な研究成果を上げていることから、順調に研究が進んでいると判断する。例えば、葉の窒素要求性を根に伝える長距離シグナル分子の発見は、これまで未解決であった機構を明らかにした大きな研究成果である。また、細菌感染に対する植物防御機構においてアンタゴニストとして機能するリガンドの発見も、当該分野の発展に大きく寄与する研究成果である。

今後、*In silico* スクリーニングによるペプチドホルモンの探索が軌道に乗れば、これまで未解決であった問題の解決につながる更に大きな研究成果が期待できる。